



## 技能五輪への再挑戦

当社は、平成7年を最後に技能五輪から一時撤退を余儀なくされておりました。これは、深刻な建設不況に加え、過去の大量採用のツケもあって屋内線部門の技能職員の採用を極端に抑えざるを得なかったためです。

ようやく、これらの諸問題も峠を越し、平成16年から技能五輪への再挑戦を開始しましたが、9年間のブランクは実に大きく、選手・指導員を確保し、いざ、競技内容の把握に取りかかったとき五輪の技能レベルの高さに驚きを感じ、正直言って、何から手をつけてよいのかわかりませんでした。

競技会での選手の動きは、作業手順に沿って流れるように課題作品を仕上げていました。彼らが競技で使っている工具は各作業にあわせいろいろな工夫をしており「正確に・早く・美しく」仕上げていくためのものでした。これを見て工具作りに取りかかりましたが、空白の9年間でベース部分をなくしていたため、見様見真似ではなかなか期待する工具ができませんでした。そんななか、みんなで何度も工夫・改善を重ねながら仕上げ、今も工夫・改善を続けています。

次は、選手が工具を使って「正確に・早く・美しく」課題を作る技能を求めることになるわけですが、これが大変なことでした。指導員は「建設マスター」にも選ばれたベテラン技能者ではありましたが、技能五輪の経験は全くありませんでした。指導員は競技中のビデオから、作業一つ一つを分析し、コツを見つけながら選手を指導してきました。しかし、金メダルを取った選手のビデオを何度見ても、同じようにはできません。

早く仕上げようとすると、作品が雑になる、作品の精度を上げようとすると時間をオーバーする。なぜできない、どうしたらできるかと、指導員と選手の葛藤の日々が今も続いています。五輪で目指す作品の精度は、0.1mm～1mm未満の世界で、実現場の何倍もの精度を要求されている上に、早さと、仕上がりの美しさも要求されています。

練習中にうまくできなかった部分を、その日のうちに手直してできても、次の日また同じミスをしてしまうことも度々で、なぜできなかったのかと考え込みます。このような練習を繰り返し、繰り返し行っていくことで、いつかは技能向上曲線が急上昇することを信じて日々努力を続けています。

現在は3年目の選手2名、2年目と1年目の選手が各1名いて、3年目の選手が2年目と1年目の選手を引っ張り、2年目と1年目の選手は先輩選手を追い抜こうと、各選手が考え・工夫し技能向上に自己研鑽しています。

技能五輪への再挑戦に取り組むなか、モノ作りの奥深さを改めて感じています。

- ・技能は見ただけでは継承できない、自分で行動して受け継ぐもの。
- ・技能を磨くには、自ら考え、工夫・改善しなければならない。
- ・どんなことがあっても、やりぬく精神力を持たなければならない。
- ・そして、作品を作った後の、「作る楽しさ」「出来上がった喜び」は苦労が多いほど大きいことを知る。

これらは、団塊世代の大量定年を控え、技術・技能の伝承が社会問題化するなか、非常に重要なことであり、技能五輪経験者が、将来指導的役割を担ってくれることを期待しているところです。

そして、今年の技能五輪全国大会は地元香川での開催でもあり4名の選手に対する期待は大きく、上位入賞を目指して最後の追い込みに入っています。

いけうち たかゆき

略歴 1972年 東海大学 電気工学科卒業  
四国電気工事(株) (現：(株)四電工) 入社  
1996年 高松営業所 所長  
2001年 徳島営業所 所長  
2003年 配電部 副部長  
2004年 人事労務部 研修センター 所長  
現在に至る